

千葉県にムササビは生息しているか？

落合啓二¹⁾・繁田真由美²⁾

¹⁾ 千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

E-mail: ochiai@chiba-muse.or.jp

²⁾ (株) 野生生物管理

〒194-0044 東京都町田市成瀬 2748-7 RT9-201

要 旨 千葉県では縄文遺跡からムササビの骨が広く出土するが、現在、ムササビは生息していないと考えられている。しかし、そのような通説にも関わらず、不確かな生息情報も存在する。そのため、千葉県における本種の生息の可能性を次の5つの方法で検討した：目撃伝聞情報の確認、目撃情報に基づく現地調査、現代の文献調査、近代の文献調査、および狩猟捕獲記録の調査。その結果、本種の生息を示唆する情報が目撃情報、現代の文献、および狩猟捕獲記録において得られた。しかし、これらの生息情報は標本・写真等の証拠、あるいは野生鳥獣に精通した者の確認を伴う確実な記録ではなく、誤認、誤記録である可能性も考えられた。近代の文献調査ではムササビの生息を示す記述は見つからず、千葉県において本種は近代までに既に絶滅していたか、ないしは稀であったと推定された。本結果、並びに千葉県において実施された数多くの自然環境・野生動物調査の結果および滑空や特徴のある声といった本種の目立ちやすい行動特性を勘案すると、千葉県においてムササビは生息していないとする従来の見解は妥当であると結論された。

キーワード：ムササビ, *Petaurista leucogenys*, 千葉県, 生息情報, 狩猟統計, 絶滅。

ムササビ *Petaurista leucogenys* は齧歯目リス科に属する日本固有種であり、本州、四国、九州に分布する。本種は飛膜を用いて木から木へと滑空する夜行性の樹上生活者である。生息域は低地～亜高山帯と幅広く、山地だけでなく丘陵地帯や平地の人家近くにも生息する。丘陵地帯や平地の生息地は道路建設や宅地造成の影響を受け易く、林地の分断・縮小に伴う生息地の孤立や後退が報告されている(岡崎ほか, 1996; 岡崎, 2003; 矢光ほか, 2008)。

関東地方においては、本種は千葉県を除く各県の丘陵地帯から山地に分布し(環境省自然環境局生物多様性センター, 2002)、埼玉県(鈴木・小林, 1985)、東京都(岡崎ほか, 1996)、神奈川県(青木ほか, 2006)では詳細な分布状況が報告されている。茨城県では八溝・阿武隈山地と筑波・加波山地に生息し、牛久市の平地林にも少なくとも1986年まで生息していたが、現在は生息が確認されなくなっている(茨城県, 2000; 山崎ほか, 2001)。また、近年、茨城県鹿島市鹿島神宮境内においてムササビの生息が確認されており(山崎晃司氏, 私信)、千葉県と利根川を隔てた場所における本種の生息情報として注目される。

千葉県においては縄文遺跡からムササビの骨が広く出土し(図1, 付表1)、縄文時代に本種が県内に生息していたと推察される。その後、成田市の6~7世紀(古墳時代)の遺跡からムササビを模したと見なされ

る動物埴輪が出土している(印旛郡市文化財センター, 1996)ものの、縄文時代より後の時代において千葉県のムササビの生息に関する確実な記録・証拠は見つかっていない。そのため、千葉県では現在、ムササビは生息していないと考えられている(成田, 1993; 五十嵐, 1999; 千葉県環境部自然保護課, 2000; 落合, 2002)。ただし、筆者らは以前より千葉県においてムササビを目撃したという伝聞情報や千葉県でのムササビの生息情報を記す不確かな報告が少なからず存在することを承知しており、それらの情報の検証の必要性を感じていた。そこで今回、千葉県におけるムササビの目撃伝聞情報の確認・整理と文献調査を実施し、その生息の可能性について改めて検討した。

方 法

1. 目撃伝聞情報の入手・確認

1990~2009年の間に、筆者の一人である落合が千葉県立中央博物館の哺乳類担当職員としての活動の中で、千葉県内におけるムササビの目撃情報の入手に努めた。目撃伝聞情報が得られた場合には一次情報源者本人の特定に努め、可能な限り一次情報源者本人に対して直接ないし電話による詳細な聞き取りを行った。

2. 現地調査

上記の目撃情報のうち、比較的近年(1990年代以

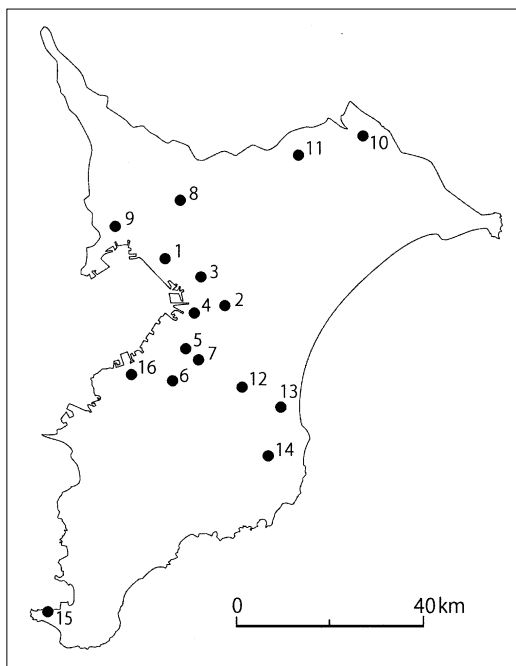


図 1. 千葉県における縄文時代のムササビ出土遺跡の分布. 出土遺跡一覧を付表 1 に示す. 図中の番号は付表 1 に対応する.

降) の 4 件について現地調査を行った. 現地調査としては, ムササビが利用する可能性の高い大径木と樹洞木 (繁田ほか, 2009) を中心に樹木の根元を探索し, ムササビの糞の発見に努めた. 現地調査は以下のとおり実施した (表 1 に対応).

- 3 鴨川市天津 東京大学大学院農学生命科学研究科附属科学の森教育研究センター千葉演習林 (以下, 東京大学千葉演習林) の 45 林班 B3, C4, C5, C10, D2 の各小林班, 2009 年 2 月 15 日 (5 名で調査)
- 4 君津市清和 三島神社境内, 2009 年 2 月 15 日 (2 名で調査)
- 5 館山市作名 目撃者自宅周辺の山林, 2008 年 8 月 30 日および 2009 年 2 月 14 日 (各 2 名で調査)
- 6 鋸南町上佐久間・大崩 佐久間ダム周辺の山林 (3 林分), 2009 年 2 月 14 日 (2 名で調査)

3. 現代の文献調査

千葉県のムササビの生息情報を報告している現代 (1946 年以降) の市町村史誌・調査報告等を探索した. ムササビの生息情報が記されていた文献に関しては, 当該文献の筆者等に問い合わせを行い, 生息情報の詳細な確認に努めた.

4. 近代の文献調査

千葉県の近代の文献におけるムササビの生息記録を調べるため, 明治時代～終戦 (1868～1945 年) に発行された千葉県内の郡誌, 町誌, 村誌等 (以下, 郡町村誌) について文献調査を行った.

5. 狩猟捕獲記録の文献調査

ムササビは古くから狩猟の対象とされ, 戦前から 1965 年頃までは主に毛皮をとるために全国で年間 1.5～6 万頭が捕獲されていた (環境庁自然保護局, 1981; 安藤, 1999; 安田, 2007). そこで, 千葉県における狩猟によるムササビの捕獲記録を調べるため, 狩猟統計・鳥獣関係統計 (林野庁, 1963, 1963～1971; 環境庁, 1972～1991; 環境庁自然保護局, 1992～1995) によって調査を行った. また, ムササビ以外の狩猟捕獲記録について, 前述の狩猟統計・鳥獣関係統計に加え, ムササビが狩猟鳥獣から除外された 1994 年以降の鳥獣関係統計 (環境庁自然保護局, 1996～2000; 環境省自然環境局, 2001～2002) を合わせて調査した.

結 果

1. 目撃伝聞情報の確認

千葉県内においてムササビを目撃したとする具体的な情報が 6 件得られた (表 1). 目撃時期は 1960 年前後から 2000 年代までであり, 目撃場所は県の中・北部が 2 件 (千葉市, 現・富里市), 南部が 4 件 (現・鴨川市, 君津市, 館山市, 鋸南町) であった. 6 件の目撃情報のうちの 4 件において, 一次情報源である目撃者本人と直接ないし電話による聞き取り調査を行うことができた. この 4 件のうちの 1 件は飛膜のある生物の死体を見たという情報であった (表 1, 1). 残りの 3 件は夕方～夜間に空中を飛ぶ生物を見てムササビだと思ったという情報であった (表 1, 2, 3, 5). 目撃した本人に聞き取り調査を行えなかった 2 件では, 夜間に空中を飛ぶ生物を見てムササビだと思ったという事例が 1 件 (表 1, 4), 目撃状況が不明な事例が 1 件 (表 1, 6) であった.

上記の目撃情報 6 件の他, 千葉県のムササビに関連する 2 件の情報を得た. 一つは, 千葉市野呂町在住の狩猟者が, 1970～1980 年代半ばに他県から持ってきたムササビを住居近くの山林に放したという情報である (渡辺正氏, 私信). この情報は, 千葉県立中央博物館準備室員 (当時) であった渡辺氏がムササビを放逐した本人から 1985 年に聞いた話である. 放逐場所周辺におけるムササビの生息情報は得られていない. もう一つの関連情報は, 1994 年 8 月 14 日に松戸市七衛門新田において, 民家の軒先にいたモモンガ (種不明. モモンガ亜科 Pteromyinae の 1 種) が救護された事例である (竹下康典氏, 私信; 千葉県自然保護課の傷病鳥獣保護記録簿による). 日本では本州, 四国,

表1. 千葉県においてムササビ（と思われる生物）を目撃したという情報.

No.	目撃時期	目撃場所	目撃情報の内容	個体確認状況	情報源および情報確認状況	現地調査の有無	備考
1	1958-1962年	千葉市花見川区 花見川	小学生のとき、現在、花見川団地がある西端あたりで飛鷹のあつと生物の死体を見てムササビだと生じた。当時、そのあたりは団地ができて前暗い林だった。	死体	千葉県野鳥の会のA氏の目撃談。一次情報源者のA氏に直接聞き取り。	なし	
2	1970年代前半	富里町（現・富里市） 七栄	夕方、自宅の畑わきのスギから谷津田に向かって飛ぶものを見てムササビだと思った。	飛翔	富里町教育委員会職員（当時）のB氏の目撃談。一次情報源者のB氏に電話で聞き取り。	なし	
3	1998年5月2日	天津小湊町（現・鴨川市） 天津	夜間、津市原天津小湊線を車で走行中に樹木の間を飛ぶものを見てムササビだと思った。場所は東京大学千葉演習林の45林班。	飛翔	東京大学千葉演習林職員（当時）のC氏の目撃談。二次情報源者のC氏に電話で聞き取り。	実施	環境省自然環境局生物多様性センタリー（2002）の分布マップにシマ表示の元となった情報。
4	2002-2003年	君津市清和地域	夜間、三島湖・豊英湖に車で行く途中、清和地域のあたりで空中を飛ぶものを見てムササビだと思った。	飛翔	千葉県野鳥の会のD氏の職場の元同僚の目撃談。D氏より二次情報を聞き取り。	実施	
5	2002年ないし 2003年の夏	館山市作名	夜間、自宅の庭あるいは裏の木から10-15mほど離れた庭のサクラに飛び移るものを見てムササビだと思った。ひと夏の間に2-3回目撃した。	飛翔	県立高校教諭のE氏の目撃談。一次情報源者のE氏に直接聞き取り。	実施	
6	2004年以前	鋸南町佐久間ダム 周辺	林道でムササビと思われるものを目撃した。知り合いには見間違いではないかと言われた。できたらずら調査してほしい。	不明	和田町在住の35歳（当時）の男性の目撃情報。2004年3月に中央博物館の春の展示「持ち込まれたケモノたち」の展示アンケートに記述されていた。	実施	記述では「三芳村、左久間ダム」とされているが、鋸南町の佐久間ダムの誤りと考えられた。

九州にニホンモモンガ *Pteromys momonga* が、北海道にエゾモモンガ *P. volans orii* がそれぞれ生息するが、千葉県ではニホンモモンガの生息記録は過去から現代にかけて皆無である。また、松戸市周辺に野生のニホンモモンガが生息するような山林は存在しない。そのため、この事例のモモンガは、ペットとして日本国内で販売・飼育されてきたタイリクモモンガ *P. volans*、アメリカモモンガ *Glaucomyss volans* 等の外国産モモンガ、あるいは飼育由来のニホンモモンガないしエゾモモンガであると考えられた。

2. 現地調査の結果

目撃情報が得られた4地域で調査を行ったが、ムササビの糞等の生息痕跡を発見することはできなかった。特に、鴨川市(表1, 3)と館山市(表1, 5)ではムササビが目撃されたという場所を特定して集中的に調査を行ったが、糞等は見つからなかった。

館山市の調査では、自宅の庭にその生物が飛んできたという目撃者の話を、現場を見ながら詳しく伺った。その結果、ムササビと見なされた生物が飛来してきてとまったというサクラは樹幹部分が地上1.5m付近から複数の枝に分岐しており、ムササビが通常行う樹幹への飛着の場所としては不向きであると思われ、その生物がムササビではなく、鳥類、特に夜間に木々の間を滑空飛行するフクロウ類ではなかったのかという印象を筆者らに与えた。当事例については、家の近くで鳴く<ギャー>という鳴き声をムササビの声と思って目撃者が録音されていたが、フクロウ *Strix uralensis* の研究者によってメスのフクロウの声であろうと判断された(樋口亜紀氏, 私信)。

3. 現代の文献における生息情報

下記1)~6)の文献において、千葉県のムササビの生息情報が報告されていた。

1) 成田(1979):「(市原)市内の(養老深谷近くの)女ガ倉で1966年ごろ、夕方の薄暗いときに5mほど直線的に飛行して松の木に止まったムササビらしい動物を見たという情報があるが確認されていない」(括弧内は筆者らによる)と記述されている。この文献の筆者に確認したところ、高校の生物部の生徒2名による目撃談とのことで、その後関連情報は得られていないとのことであった(成田篤彦氏, 私信)。

2) 千葉県(1979):環境庁による第2回自然環境保全基礎調査のアンケート調査において、「ムササビは館山市で生息しているという回答があった」と記述されている。この情報について千葉県自然保護課に問い合わせたが、詳細は不明であった。

3) 千葉県環境部自然保護課(1981):ムササビについて「以前、館山市の野鳥の森あたりで見たという報告はありますが、最近の確実な情報はありません」

と記述されている。本文献は2)と同じ千葉県自然保護課による報告であり、生息情報が得られた場所も同じ館山市であるため、この文献の生息情報は2)と同一である可能性が考えられた。この情報について千葉県自然保護課および千葉県立館山野鳥の森に問い合わせたが、詳細は不明であった。また、当野鳥の森の所長の話によれば、当野鳥の森内においてムササビの生息情報が得られたという話は聞いたことがないとのことであった(淵辺文明氏, 私信)。さらに、館山市を中心に自然観察活動を継続している安房生物愛好会(会員数:約130名)の事務局にも確認したが、館山市およびその周辺地域においてムササビの生息情報が得られたことはないとのことであった(小林洋生氏, 私信)。

4) 小金沢・東(1985):元清澄山自然環境保全地域において生息が考えられる種として、「ムササビ(小金沢, 未発表)」と記述されている。この未発表情報について当人に確認したところ、ムササビの食痕と思われた落枝は昆虫によるものとその後判明し、また君津市郷台で<ギャー ギャー>という種不明の声を聞いたことはあるが、目撃等の確実な記録はなく、房総にムササビは生息していないだろうという見解であった(小金澤正昭氏, 私信)。

5) 千葉県環境部自然保護課(1992):アンケート回答によるムササビ生息情報が千葉市内の1メッシュ(1kmメッシュ単位)において報告されている。この情報について千葉県自然保護課および調査実施機関に問い合わせたが、詳細は不明であった。この生息情報の位置は、前述のムササビの放逐情報が得られた千葉市野呂町から約15km離れている。この2つの情報の関連性は不明である。本文献においては、千葉市内からのアンケート回答に加えて1985年の狩猟捕獲記録(1頭)および館山市での生息情報(「環境庁, 1978」)を引用し、「県内における本種の分布は局所的であり、その生息数も少ないものと推測される」と記述している。なお、この「環境庁(1978)」は本文献の引用文献リストに基づけば環境庁(1979)の誤記と考えられた。さらに、環境庁(1979)は2)で記した第2回自然環境保全基礎調査の全国の結果を取りまとめた報告であるが、確認したところ千葉県のムササビについての記述は見つからなかった。そのため、同じ第2回自然環境保全基礎調査による館山市の生息情報ということから、本文献で引用している環境庁(1979)は2)の千葉県(1979)の誤引用である可能性が考えられた。

6) 環境省自然環境局生物多様性センター(2002):千葉県南部の1メッシュ(約10kmメッシュ単位)においてムササビ生息情報が報告されている。本文献のデータを収集した1997~1998年度実施の生物多様性調査において、表1, No.3の情報が東京大学千葉演習林によって環境庁に提出されており(山中征夫氏, 私

千鰯類にムササビは生息しているか？

表2. 陸生野生哺乳類の生息記録が記されていた千葉県内の近代（明治時代～終戦，1868～1945年）の郡町村誌と記録出現種. : 生息の記述あり， : 生息するが稀・甚少の記述あり，x : 郡町村誌の該当地域からいなくなったという記述なし. ムササビ，カワネズミ，カワウソノ（近代に絶滅），および外来種を除けば，この表における当時の生息種は現在の生息種と一致する. 動物名の旧漢字表記は加納（2007）に従って現在の種名と対応させた.

出典	書名	現在の地域名	発行年(年号)	食虫目															
				食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目	食虫目		
千葉県市原郡教育會 (1916)	千葉県市原郡誌	市原市	大正5	カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
編著者不明 (19**)	東海村誌 上巻	市原市五井	大正年間	カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県東葛飾郡教育會 (1923)	千葉県東葛飾郡誌	東葛飾地域	大正12	x	カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
船橋町誌編纂委員会 (1937)	船橋町誌	船橋市	昭和12		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県印旛郡役所 (1913)	千葉県印旛郡誌	印旛地域	大正2		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
編著者不明 (1917a)	松戸町誌	松戸市	大正6		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
編著者不明 (1917b)	小金町誌	松戸市	大正6		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県長生郡長生郡教育會 (1913)	長生郡郷土誌	長生地域	大正2	x	カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県海上郡教育會 (1917)	千葉県海上郡誌	海上地域	大正6		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
夷隅郡役所 (1923)	千葉県夷隅郡誌	夷隅地域	大正12		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
編著者不明 (1925)	総野村誌	勝浦市	大正14		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県安房郡教育會 (1926)	千葉県安房郡誌	安房地域	大正15		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ
千葉県君津郡教育會 (1927)	千葉県君津郡誌	君津地域	昭和12		カワネ	ニホン	コウモ	コウモ	カワネ	ニホン	カワウ	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	ニホン	イノシ

*1 飼いウサギの可能性もある.

*2 ネズミ類を示している可能性もある.

*3 「かねづみ」と記されていたが，カワネズミChimarrogale platycephala を示すのかは不明である. カワネズミの生息記録は千葉県では得られていない.

表3. 千葉県におけるムササビの狩猟捕獲記録。データは狩猟統計・鳥獣関係統計（林野庁，1963，1963-1971；環境庁，1972-1991；環境庁自然保護局，1992-1995）による。：データなし。x：ムササビは1994年度より非狩猟獣。

年度	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	小計
捕獲記録頭数				0	0	0	1	0	0	0	1
年度	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	小計
捕獲記録頭数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
年度	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	小計
捕獲記録頭数	13	0	0				0	0	0	20	33
年度	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	小計
捕獲記録頭数	2	21	5	6	0	4	0	0	0	2	40
年度	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	小計
捕獲記録頭数	0	0	51	0	0	0	0	0	0	0	51
年度	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	小計
捕獲記録頭数	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	5
年度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	小計
捕獲記録頭数	1	0	0	13	0	1	0	0	0	0	15
年度	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	小計
捕獲記録頭数	5	0	0	0	x	x	x	x	x	x	5
計											150

信)、この文献の生息情報は表1, No.3 と同一と考えて間違いない。本文献のムササビ分布図においては、「房総半島のデータは今後確認を要する」と注記されている。

これらの他、五十嵐(1999)において、館山でのムササビの生息を報告している文献として「文部省(1978)」が引用されている。この「文部省(1978)」は五十嵐(1999)の引用文献リストに記されていないため筆者に問い合わせたところ、「文部省(1978)」は5)に記した環境庁(1979)(実際は千葉県(1979))の誤記であることが確認された(五十嵐和廣氏,私信)。

以上のとおり、現代の文献における生息情報は、聞き取りによる目撃情報との重複である6)を除くと、市原市、館山市、および千葉市におけるアンケート回答・目撃情報の3件に整理された。

4. 近代の郡町村誌における生息情報

38編の郡町村誌(1県誌,13郡誌,24町村誌)を調べた結果、13編(8郡誌,5町村誌)において野生哺乳類の記述を確認した。これらでは16種(モグラ類,コウモリ類,ネズミ類をそれぞれ1種とする。)の陸生哺乳類の生息が記述されていたが、ムササビの生息を記した文献はなかった(表2)。近代の郡町村誌において記述されている生息動物は、近年、千葉県に移入した外来種、近代に絶滅したカワウソ *Lutra lutra*、および「かはねづみ」と記されていた動物を除けば、すべて千葉県の現在の陸生哺乳類の生息種と一致した。

5. 狩猟捕獲記録

1923~1993年度を対象に調査した結果、1926~1990年度のうちの17の年度において、千葉県のムササビの狩猟捕獲が全部で150頭(1~51頭/年度)記録されていた(表3)。この狩猟捕獲記録では、千葉県に生息していないツキノワグマ *Ursus thibetanus* が1940~1960年度のうちの4つの年度において合計19頭(1~13頭/年度)捕獲されたことになっていた(林野庁,1963)。同様に、千葉県での生息が確認されていないクリハラリス(タイワンリス) *Callosciurus erythraeus* が1989~2002年度のうちの11の年度において合計65頭(1~27頭/年度)、同じくシマリス *Tamias sibiricus* が1990~1997年度のうちの6つの年度において合計67頭(1~53頭/年度)捕獲されたことになっていた(環境庁,1991;環境庁自然保護局,1992~2000;環境省自然環境局,2001~2002)。

考 察

本調査では千葉県におけるムササビの生息を示唆する情報が目撃情報、現代の文献、および狩猟捕獲記録において得られた。しかし、これらの情報は、下記に

考察するとおり本種の生息を確実に示すものではなかった。

伝聞情報に基づくムササビの目撃情報は6件得られたが、これらの目撃者の中でムササビや鳥獣全般について精通している者がいないこと(表1, 1の事例は千葉県野鳥の会の会員の情報であるが、本人が小学生のときの目撃談である。),写真等の確実な証拠がないこと、および目撃場所を特定した現地調査において生息の痕跡が確認できなかったことより、目撃情報を裏付けることはできなかった。千葉県におけるムササビの生息情報を報告する現代の文献は6件(実質的には3件)確認されたが、いずれも生息を裏付ける確かな情報・資料を伴う報告ではなかった。目撃時の状況が明らかな目撃情報は、目撃伝聞情報と現代の文献情報を合わせると計6件の情報が得られたが、飛膜のある生物の死体を見たという1件を除くと、いずれも飛翔中の姿を見たという事例であった。ムササビにおいて通常見られる樹洞から顔を出した姿や後肢で横枝につかまった姿の目撃事例であればフクロウ類との誤認の可能性は低いものと思われるが、そのような目撃事例はなかった。

狩猟捕獲記録においては、1926~1990年度に千葉県で150頭のムササビが捕獲されたことになっていた。ただし、狩猟者免許の効力は、1962(昭和37)年度までは住所地の都道府県知事から狩猟免許の交付を受けて全国一円に有効であったが、狩猟法の改正により1963(昭和38)年度からは狩猟免許を交付した都道府県知事の管轄する区域内のみ有効となった。そのため、狩猟統計の狩猟捕獲数は1963年度以降では千葉県の捕獲数となっているが、1962年度以前では千葉県の狩猟免許者が県外で捕獲した数を含んでいる(江原・小柳,1969;千葉県農林部林務課,1979)。本調査では千葉県に生息していないツキノワグマの捕獲記録が確認されたが、これは狩猟法の改正があった1962年度以前の記録であり、県外で捕獲された数が計上されたと理解される。ムササビについても千葉県で捕獲記録があった150頭のうち125頭は1962年度以前の記録であり、これらは必ずしも千葉県内で捕獲されたことを示していない。一方、制度上では県内で捕獲された数だけが計上されるようになった1963年度以降に記録されている25頭については、より一層の注意を払う必要がある。ただし、狩猟統計・鳥獣関係統計の捕獲数の記録に関しては、種の判定や報告の信頼性に問題があることが以前より指摘されている(黒田,1969;朝日,1978)。千葉県の近年の狩猟捕獲記録においても、クリハラリス(タイワンリス)、シマリスといった千葉県の生息未確認種が少なからず捕獲されたことになっており、不正確な記録が含まれている可能性が示唆された。そのため、狩猟捕獲記録から千葉県にムササビが近年生息していたと直ちに認め

ることは避けるべきであり、その信頼性についてさらなる検討が必要であると考えられた。

上記のとおり、千葉県におけるムササビの生息を示唆する目撃情報、現代の文献、狩猟捕獲記録が存在したが、これらはいずれも標本・写真等の証拠、あるいは野生鳥獣に精通した者の確認を伴う確実な記録ではなかった。そのため、これらの生息情報については、誤認、誤記録である可能性が否定できない。一般的にアンケート調査や聞き取り調査においては不正確な情報が混入することは避けられない。そのため、そのような調査で生息未確認種の情報が得られた場合には情報の具体的な内容の確認・検討が必要であり、得られた情報をそのまま報告することは問題が多い。九州におけるニホンリス *Sciurus lis* の生息記録を精査した安田 (2007) も聞き取りによる生息情報の信頼性が低いこと、および採集の時期、場所等が明らかな標本ないし写真といった証拠に基づく信頼性のある生息確認の必要性を指摘している。また、本調査においては、ムササビとモンガ類の人為的移入の事例が確認された。千葉県のムササビの生息情報の中に、このような人為的移入個体が一時的に目撃された事例が含まれている可能性もまた否定できない。

本調査では、近代の郡町村誌において生息していると記述されていた動物は、基本的にすべて千葉県の現在の生息種と一致した。そのため、近代の郡町村誌の記述は必ずしも科学的といえないものの、その内容は当時の哺乳類相を知る手がかりとして有用であると判断された。その記録にムササビの生息記録がないことは、当時の千葉県にムササビが生息していなかったか、生息していても稀であったことを示す資料になると考えられた。以上のとおり、狩猟捕獲記録に関してはさらなる検証が必要であるが、本調査の結果としては、近・現代の千葉県にムササビが生息していた・生息しているという事実を確認することはできなかった。

上記の結果に加え、現在、千葉県においてムササビが生息する可能性が低

表4. 千葉県南部の房総丘陵で実施された野生動物の主な夜間調査。

調査地域	実施時期 (年)	夜間調査の 日数 (日)	調査内容	出典
旧天津小湊町・鴨川市・君津市 (東京大学千葉演習林内の林道)	1991-1992	14	野生動物のドライブ・センサス調査	落合・浅田 (1992)
旧天津小湊町・鴨川市・君津市 (東京大学千葉演習林内の林道)	1993	12	野生動物のドライブ・センサス調査	落合 (1994)
旧天津小湊町・鴨川市	1992-2007	48	ニホンジカのライト・センサス調査	千葉県環境部自然保護課・房総のシカ調査会 (1993-2000)、 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会 (2001a- 2007a)、千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博 物館・房総のシカ調査会 (2008 a)
旧天津小湊町・鴨川市・君津市 (内浦山県民の森・東京大学千葉 演習林ほか)	1992-1996	220 *	ニホンジカのラジオ・テレメトリ調査	千葉県環境部自然保護課・房総のシカ調査会 (1993-1996)
大多喜町	2000-2002	130 *	イノシシのラジオ・テレメトリ調査	千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会 (2001b・ 2002b)
勝浦市	2007-2008	90 *	キヨンのラジオ・テレメトリ調査	千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会 (2007b)、 千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博物館・房 総のシカ調査会 (2008 b)
計		514 *		

* 概数。

いと考えられる根拠を2つ指摘しておきたい。一つは、ムササビの生息地域では幼獣の巣からの落下等により個体が救護される場合が少なくなく、神奈川県や栃木県では年に数件程度の本種の救護事例が報告されている(谷ほか, 2000; 丸山・久竹, 2003)が、千葉県ではそのような事例は確認されていない。もう一つは、千葉県ではこれまで多くの野生動物調査や自然公園・自然環境保全地域等の自然環境調査が実施されているが、ムササビの生息を伝える確実な報告は皆無である。特に、千葉県南部の房総丘陵においては夜行性の動物が確認されやすい夜間調査がこれまで500日以上実施されており(表4)、各種の夜行性動物が確認されているが、ムササビの生息を裏付ける情報は一つも得られていない。ムササビは夜行性という点では人の目につきにくい。しかし、大径木・樹洞木のある場所では寺院・神社等の人の出入りの多い場所でも生息すること、また滑空という目立つ行動や独特の鳴き声を発するという点において、生息していればむしろ確認されやすい動物といえる。このように目立ちやすいというムササビの特徴と千葉県内で繰り返し実施されてきた野外調査にも関わらず、本種の生息を裏付ける確実な証拠がこれまで一つも得られていないことは、千葉県に本種は生息していないことを示唆するものと考えられた。以上のことより、今回の検証結果から見るかぎり、ムササビを千葉県の非生息種とする従来の見解(成田, 1993; 五十嵐, 1999; 千葉県環境部自然保護課, 2000; 落合, 2002)は妥当であると結論された。今後とも千葉県における本種の生息の可能性には注意を払う必要があるが、その際にはフクロウ類との誤認、あるいは本調査で事例が得られたムササビやモンガ類の人為的な移入に関する留意が求められる。

縄文時代に千葉県で生息していたムササビが現在はいないとすると、本種はいつの時代かに千葉県から絶滅したことになる。それはいつのことで、その原因は何であろうか。近代の文献調査の結果からは、明治～昭和初期の時代に千葉県のムササビは既に絶滅していたか稀であったことが推定された。九州ではニホンリス、ニホンモンガ、ムササビの減少の要因として、狩猟と1950～1970年代前半の拡大造林の影響があげられている(安田, 2007)。このうち、戦後の拡大造林の影響については、今回の近代の文献調査結果を考えると、千葉県のムササビには当てはまらない可能性が高い。そのため、現在のところ、千葉県のムササビの絶滅の要因としては近代より前の時代における狩猟の影響や環境改変が考えられるが、この問題の検討は今後の課題である。

謝 辞

本調査は、千葉県環境生活部自然保護課による千葉県レッドデータブック(動物編)(千葉県環境部自然

保護課, 2000; 千葉県環境生活部自然保護課, 2006)の改訂作業に伴い実施した。演習林内での調査を許可していただいた東京大学千葉演習林, 当演習林内での現地調査に御協力いただき、さらに演習林内の情報を提供いただいた当演習林職員の山中征夫(当時)、根上昌久、三次充和の各氏、狩猟統計・鳥獣関係統計に関して御教示いただいた村井和之氏(千葉県環境生活部自然保護課)・安田雅俊氏(森林総合研究所九州支所)、茨城県におけるムササビの生息状況を御教示いただいた山崎晃司氏(ミュージアムパーク茨城県自然博物館)、フクロウの声の同定に御協力いただいた樋口亜紀氏(国立科学博物館)、縄文遺跡の関連文献を御紹介いただいた田邊由美子氏(千葉県立中央博物館)、文献の入手に御協力いただいた田村典子氏(森林総合研究所多摩森林科学園)・木下史夫氏(自然環境研究センター)、投稿原稿を審査していただいた安藤元一氏(東京農業大学)、千葉県におけるムササビ情報の入手・確認に御協力いただいた安房生物愛好会、千葉県環境生活部自然保護課、千葉県立館山野鳥の森、洲辺文明、五十嵐和廣、飯島滋哉、池田文隆、石井章、柏動物病院、小林洋生、小金澤正昭、中村昇、直井洋司、成田篤彦、小幡弘展、篠原正、鈴木藤蔵、高橋康美、高橋百合子、竹下康典、富谷健三、渡辺正の各氏、各機関・団体に御礼申しあげる。

引用文献

- 安藤元一. 1999. 日本における人とムササビとの関わり. 哺乳類科学 39: 175-179.
- 青木雄司・重昆達也・繁田真由美・柳川美保子・蓮田弘美・山口尚子・竹内時男・小林俊元・佐藤 健・二宮孝子・早川広美. 2006. 神奈川県におけるムササビの分布. 神奈川自然誌資料 27: 27-40.
- 朝日 稔. 1978. イノシシ, クマ類およびシカの捕獲数の変動. 哺乳動物学雑誌 7: 206-218.
- 千葉県. 1979. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(哺乳類). 27 pp. 千葉県, 千葉市.
- 千葉縣安房郡教育會. 1926. 千葉縣安房郡誌. 千葉縣安房郡教育會. (1991復刻). 4104 pp. 千秋社, 東京.
- 千葉縣長生郡長生郡教育會. 1913. 長生郡郷土誌. 千葉縣長生郡長生郡教育會. (1987復刻). 536 pp. 臨川書店, 京都市.
- 千葉縣東葛飾郡教育會. 1923. 千葉縣東葛飾郡誌. 千葉縣東葛飾郡教育會. (1972復刻). 2436 pp. 斎書房, 流山市.
- 千葉縣市原郡教育會. 1916. 千葉縣市原郡誌. 千葉縣市原郡役所. (1985復刻). 千葉縣市原郡誌 総説編. 556 pp. 国書刊行会, 東京.
- 千葉縣印旛郡役所. 1913. 千葉縣印旛郡誌. [千葉縣印旛郡役所.] (1985復刻). 千葉県印旛郡誌 前篇.

- 621 pp. 臨川書店, 京都市.
- 千葉縣海上郡教育會. 1917. 千葉縣海上郡誌. 千葉縣海上郡教育會. (1985 復刻). 1458 + 49 + 36 pp. 千葉出版, 千葉市.
- 千葉県環境部自然保護課. 1981. 千葉県の自然 - 自然保護とわたしたち -. 135 pp. 千葉県, 千葉市.
- 千葉県環境部自然保護課. 1992. 獸類生息分布図作成調査報告書. 79 pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉市.
- 千葉県環境部自然保護課. 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 - 千葉県レッドデータブック - 動物編. 438 pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉市.
- 千葉県環境部自然保護課・房総のシカ調査会. 1993-2000. 千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書 1-8. 千葉県環境部自然保護課・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課. 2006. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト (動物編) <2006 年改訂版>. 36 pp. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 2001a-2007a. 千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書 9-15. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 2001b. 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書 1. 95 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 2002b. 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書 2. 97 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 2007b. 平成 18 年度外来種緊急特別対策事業 (キョンの生息状況等調査) 報告書. 88 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博物館・房総のシカ調査会. 2008a. 千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書 16. 42 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博物館・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博物館・房総のシカ調査会. 2008b. 平成 19 年度外来種緊急特別対策事業 (キョンの生息状況等調査) 報告書. 73 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・千葉県立中央博物館・房総のシカ調査会, 千葉市.
- 千葉県君津郡教育會. 1927. 千葉縣君津郡誌. 千葉縣君津郡教育會. (1971 復刻). 上巻. 858 pp. 嵩書房, 流山市.
- 千葉県教育委員会. 1961. 印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査 (本編). 296 pp. + 39 図版. 千葉県教育委員会, 千葉市.
- 千葉県教育委員会. 1983. 千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書. 177 pp. 千葉県教育委員会, 千葉市.
- 千葉県農林部林務課. 1979. 千葉県林政のあゆみ. 680 pp. 千葉県農林部林務課, 千葉市.
- 江原秀典・小柳和助. 1969. 狩猟制度. 所収 林野庁 (編), 鳥獣行政のあゆみ, pp. 259-374. 林野弘済会, 東京.
- 船橋町誌編纂委員会. 1937. 船橋町誌. [船橋町.] (1981 復刻). 491 pp. 青史社, 東京.
- 編著者不明. 1917a. 松戸町誌. [松戸町.] (1964 復刻). 松戸町誌. 所収 松戸市誌編纂委員会 (編), 松戸市史料第四集 松戸町誌・小金町誌 (大正六年), pp. 1-195. 松戸市役所, 松戸市.
- 編著者不明. 1917b. 小金町誌. [小金町.] (1964 復刻). 松戸町誌. 所収 松戸市誌編纂委員会 (編), 松戸市史料第四集 松戸町誌・小金町誌 (大正六年), pp. 197-427. 松戸市役所, 松戸市.
- 編著者不明. 1925. 総野村誌. 頁打ちなし. [総野村.] 編著者不明. [19**.] 東海村誌 上巻. 頁打ちなし. [東海村.]
- 茨城県. 2000. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物<動物編>. 茨城県版レッドデータブック. 195 pp. 茨城県生活環境部環境政策課, 水戸市.
- 五十嵐和廣. 1999. 千葉県の哺乳類. 所収 千葉県生物学会 (編), 千葉県動物誌, pp. 1108-1118. 文一総合出版, 東京.
- 印旛郡市文化財センター. 1996. 南羽鳥遺跡群 (本文編) 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書 (). 376 pp. 成田スポーツ開発株式会社, 成田市.
- 夷隅郡役所. 1923. 千葉縣夷隅郡誌. 夷隅郡役所. (1976 復刻). 918 pp. 臨川書店, 京都市.
- 金子浩昌. 1958a. 狩猟活動. 所収 平野元三郎・金子浩昌 (編), 館山鉦切洞窟, pp. 120-123. 千葉県教育委員会, 千葉市.
- 金子浩昌. 1958b. 動物遺存体. 所収 平野元三郎・金子浩昌 (編), 館山鉦切洞窟, pp. 75-119. 千葉県教育委員会, 千葉市.
- 金子浩昌. 1961. 採集された自然遺物について. 所収 南総郷土文化研究会 (編), 上高根貝塚, pp. 12-20. 南総郷土文化研究会, 千葉県南総町.
- 金子浩昌. 1976. 加曾利南貝塚の動物. 所収 杉原莊介 (編), 加曾利南貝塚, pp. 38-59. 中央公論美術出版, 東京.
- 金子浩昌・小柳美登里・牛沢百合子. 1973. 飯富山野貝塚出土の脊椎動物遺存体. 所収 袖ヶ浦町山野貝塚, pp. 221-229. 東京電力, 東京・千葉県都市公

- 社，千葉市。
- 金子浩昌・丹羽百合子．1982．脊椎動物遺存体の分布密度．所収 金子浩昌（編），貝塚出土の動物遺体 - 関東地方・縄文時代貝塚の動物相とその考古学的研究 - ，pp. 51-128．千葉市加曾利貝塚博物館，千葉市。
- 環境庁．1972-1991．鳥獣関係統計．環境庁，東京。
- 環境庁．1979．第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（哺乳類）．91 pp．環境庁，東京。
- 環境庁自然保護局．1981．自然保護行政のあゆみ - 自然公園50周年記念 - ．786 pp．第一法規出版，東京。
- 環境庁自然保護局．1992-2000．鳥獣関係統計．環境庁自然保護局，東京。
- 環境省自然環境局．2001-2002．鳥獣関係統計．環境省自然環境局，東京。
- 環境省自然環境局生物多様性センター．2002．生物多様性調査動物分布調査（哺乳類）報告書．241 pp．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田市。
- 加納喜光．2007．動物の漢字語源辞典．414 pp．東京堂出版，東京。
- 川戸 彰．1967．千葉県茂原市石神貝塚．日本考古学年報 15: 101-102。
- 上総国分寺台遺跡調査団．1977．西広貝塚 - 上総国分寺台遺跡調査報告 - ．636 pp. + 184 図版．早稲田大学出版界，東京。
- 小金沢正昭・東 英生．1985．元清澄山自然環境保全地域（中大型哺乳類）．所収 千葉県環境部自然保護課（編），千葉県自然環境保全地域等変遷調査報告書 1985，pp. 39-41．千葉県環境部自然保護課，千葉市。
- 小宮 孟．1998．武士遺跡出土脊椎動物遺存体．所収 千葉県文化財センター（編），千葉県文化財センター調査報告第322集 市原市武士遺跡2 福増浄水場埋蔵文化財調査報告書第3分冊，pp. 1639-1746．千葉県水道局，千葉市・千葉県文化財センター，四街道市。
- 古作貝塚調査団．1985．古作貝塚 - 遺跡確認調査報告 - ．124 pp. + 31 図版．船橋市遺跡調査会，船橋市。
- 黒田長久．1969．鳥獣の生息概要．所収 林野庁（編），鳥獣行政のあゆみ，pp. 424-469．林野弘済会，東京。
- 丸山哲也・久武俊也．2003．傷病獣として保護されたムササビの状況（栃木県の例）．リスとムササビ 13: 14-15．
- 茂原市史編さん委員会．1966．茂原市史．943 pp．茂原市，茂原市。
- 成田篤彦．1979．市原市の動物．所収 市原市教育委員会（編），市原市史 別巻，pp. 673-711．市原市，
- 市原市。
- 成田篤彦．1993．房総の動物誌．258 pp．うらべ書房，木更津市。
- 西本豊弘・伊藤良枝．1998．有吉北貝塚出土の動物遺体（両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類）．所収 千葉県文化財センター（編），千葉県文化財センター調査報告第324集 千葉東南部ニュータウン19 - 千葉市有吉北貝塚1 - ，pp. 19-39．住宅・都市整備公団千葉地域支社，千葉市・千葉県文化財センター，四街道市。
- 西村正衛．1971．利根川下流域における縄文文化編年の研究の概要．所収 九学会連合利根川流域調査委員会（編），利根川 自然・文化・社会，pp. 76-112．弘文堂，東京。
- 落合啓二．1994．県立養老溪谷奥清澄自然公園哺乳類調査．所収 千葉県自然環境調査会（編），自然公園自然環境調査報告書 県立養老溪谷奥清澄自然公園・県立高岩山自然公園・県立嶺岡山系自然公園，pp. 37-43．千葉県環境部自然保護課，千葉市。
- 落合啓二．2002．哺乳綱 Mammalia．所収 千葉県史料研究財団（編），千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物，pp. 880-881．千葉県，千葉市。
- 落合啓二・浅田正彦．1992．哺乳類相調査．所収 千葉県自然環境調査会（編），自然公園自然環境調査報告書 南房総国定公園（岬町～和田町），pp. 53-59．千葉県環境部自然保護課，千葉市。
- 岡崎弘幸．2003．多摩川流域におけるムササビの環境選択に関する研究．34 pp．財団法人とつきゅう環境浄化財団（研究助成・一般研究 Vol. 25, No. 142），東京。
- 岡崎弘幸・今西 誠・重昆達也．1996．東京都におけるムササビ *Petaurista leucogenys* の分布．東京都高尾自然科学博物館研究報告 17: 1-24。
- 大山 柏・池上啓介・大給 伊．1937．千葉縣一宮町貝殻塚貝塚調査報告．史前学雑誌 9: 239-274．
- 立教大学考古学研究会．1975．新田野貝塚 - 千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚 - ．84 pp．立教大学考古学研究会，東京。
- 林野庁．1963．狩猟免許者の鳥獣捕獲の統計（1923年～1960）1963年版．181 pp．林野庁，東京。
- 林野庁．1963-1971．鳥獣関係統計．林野庁，東京。
- 坂口新次．1958．自然遺物．所収 早稲田大学高等学院歴史研究部（編），千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書，pp. 113-118．早稲田大学高等学院歴史研究部，東京。
- 繁田真由美・荘司たか志・重昆達也・安藤元一．2009．東京都町田市におけるムササビ孤立個体群の生息環境．森林野生動物研究会誌 34: 37-43．
- 鈴木欣司・小林悦子．1985．埼玉県のムササビ．動物

と自然 15: 25-29 .

滝口 宏 . 1961 . 印旛手賀 印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査 . (1985 復刻) . 296 pp. + 39 図版 + 61 pp. + 12 図版 . 早稲田大学出版部 , 東京 .

谷さやか・古林賢恒・羽太博樹・島村恵美 . 2000 . 神奈川県立自然保護センターに保護されたムササビ (*Petaurista leucogenys*) の放獣試験 . 神奈川県立自然保護センター報告 17: 11-24 .

八千代市編さん委員会 . 1978 . 八千代市の歴史 . 698 pp . 八千代市 , 八千代市 .

矢光啓志・橋本善太郎・松尾友矩 . 2008 . 南多摩地域の丘陵地におけるムササビの分布情報解析 . 野生生物保護 11: 11-18 .

山崎晃司・小柳恭二・辻 明子 . 2001 . 茨城県でこれまでに確認された哺乳類について . 茨城県自然博物館研究報告 4: 103-108 .

安田雅俊 . 2007 . 絶滅のおそれのある九州のニホンリス , ニホンモモンガ , およびムササビ - 過去の生息記録と現状および課題 - . 哺乳類科学 47: 195-206 .

注 : [] 書きは不確かなもの .

Does the Japanese Giant Flying Squirrel *Petaurista leucogenys* Still Survive in Chiba Prefecture, Central Japan?

Keiji Ochiai¹⁾ and Mayumi Shigeta²⁾

¹⁾ Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan
E-mail: ochiai@chiba-muse.or.jp

²⁾ Wildlife Management Company
2748-7 RT9-201 Naruse, Machida 194-0044, Japan

The Japanese giant flying squirrel *Petaurista leucogenys* is likely to have lived in Chiba Prefecture during the Jomon period (10,000-400 B.C.), as ancient bones of this species have been found widely among the remains of the period in this area. There is no evidence or accurate record to suggest that this animal lived in Chiba Prefecture after the Jomon period, and therefore it has been considered to have become extinct. Nevertheless, in spite of this generally accepted view, some fragmentary information has led to a persisting belief that this species may still survive somewhere in Chiba Prefecture. In order to examine this possibility, we conducted an investigation using five approaches.

1) Checking hearsay sighting information about carcasses or live individuals. 2) Field research to find signs, including feces, at locations where sightings have been reported. 3) Searching the contemporary literature published after 1945. 4) Searching literature published in the modern era (1868-1945). 5) Checking records of hunting statistics. Some sighting information, contemporary literature, and hunting records suggesting the existence of the giant flying squirrel in Chiba Prefecture were found. However, much of this information may have been based on misconception and/or errors in the records, because there was no accompanying evidence such as specimens or photographs, or accurate observations by wildlife specialists. A survey of the literature published in the modern era indicated that by this time the species had probably already become extinct in Chiba Prefecture, or was very rare. No undisputed evidence to indicate that the flying squirrel still survived in Chiba Prefecture, or had done so during the contemporary or modern era, was found. Thus, the generally accepted view that the species no longer survives in Chiba Prefecture was concluded to be valid, taking into account the present results, the results of numerous nature and wildlife studies conducted in Chiba Prefecture, and the conspicuous behavior of this animal including its gliding and characteristic call.

付表1. 千葉県における縄文時代のムササビ出土遺跡.

遺跡名	所在地	出典
1 櫛橋	千葉市花見川区さつきが丘	金子 (1958a)
2 野呂山田	千葉市若葉区野呂町	千葉県教育委員会 (1961, 1983); 滝口 (1961)
3 加曽利	千葉市若葉区桜木町	金子 (1976); 金子・丹羽 (1982)
4 有吉北	千葉市緑区有吉町	西本・伊藤 (1998)
5 西広	市原市西広	上総国分寺台遺跡調査団 (1977); 金子・丹羽 (1982)
6 上高根	市原市上高根	金子 (1961); 金子・丹羽 (1982)
7 武士	市原市福増	小宮 (1998)
8 佐山	八千代市佐山	八千代市編さん委員会 (1978)
9 古作	船橋市古作	古作貝塚調査団 (1985)
10 大倉南	香取市大倉	西村 (1971); 金子・丹羽 (1982)
11 奈土	成田市奈土	坂口 (1958); 西村 (1971); 千葉県教育委員会 (1983)
12 石神	茂原市石神	茂原市史編さん委員会 (1966); 川戸 (1967); 千葉県教育委員会 (1983)
13 一宮	一宮町一宮	大山ほか (1937)*; 金子 (1958a); 千葉県教育委員会 (1983)
14 新田野	大原町新田野	立教大学考古学研究会 (1975)
15 鉦切洞窟	館山市浜田	金子 (1958b); 金子・丹羽 (1982)
16 山野	袖ヶ浦市飯富	金子ほか (1973); 千葉県教育委員会 (1983)

*ムササビの出土は疑問符が付けられて記載.